

批評・紹介

間野英二著

バーブル・ナーマの研究 I 校訂本・II 總索引

菅原 陸

一五世紀の中央アジアでは、チムール朝治下の文化的繁榮の下に、チュルク系言語による宮廷文學も著しい發展を示した。そこで用いられたチャガタイ・トルコ語と呼ばれる言語は、イスラム化以降の東方チュルク語圏を代表する文章語としてチムール朝崩壊後も長い間重要性をもち続けた。今日その文章語としての地位はウズベク語や新ウイグル語などの民族語に取って代わられたものの、近年の民族意識の高まりや傳統文化の見直しとともに、古典文學の言葉としてのチャガタイ・トルコ語が再び關心を集めている。

しかしこのような重要性にもかかわらず、チャガタイ・トルコ語文獻自體の研究はチュルク語文獻學全體の中でも未發達の段階にとどまっていると言わざるを得ない。このことは、例えば同じく中央アジアのチュルク語文獻に屬するウイグル文獻(九一—一四・一五世紀)の研究状況と比較してみれば明らかである。ウイグル文獻の研究は、今世紀初頭以來、轉寫、解釋(翻譯)、注釋、語彙の抽出といった一連の文獻學的作業を経たテキストがすでに數多く發表されているだけでなく、これらの蓄積に基づいて體系的な文法書や辭書が編集されるなどの成果をあげている。ウイグル文獻の研究がこの

ような形で進展した背景には、ウイグル語がひとたび忘れられた後に長い年月を経て再發見された「死語」であり、研究者たちがいかにゼロからの出發としてそれらの讀解・整理を着實に進めていかざるを得なかったという事情がある。それに對して、古典として代々讀み繼がれてきたチャガタイ・トルコ語文獻の場合、ある意味で當然のことながらそのような嚴密な學問的手續きの必要性があえて認識されることはなかった。加えてチャガタイ・トルコ語が中央アジアの廣い地域に普及していたことは、同一作品の數多くの寫本が世界のあちこちに散在するという狀況を生みだし、それら全體を視野においた研究を物理的に極めて困難なものとした。その結果、古くから中央アジア以外にまで知られている『バーブル・ナーマ』のような高名な作品であっても、他の大部分のチャガタイ・トルコ語文獻と同様、本文批判による信頼できるテキストが提出されていないという狀態が長く續いたのであった。

『バーブル・ナーマ』の名で知られるのは、チムール朝王家の出身で、後にインドでムガル朝をおこした Zahir al-din Muhammad Babur (1483-1530) がチャガタイ・トルコ語で著した回想録である。波亂の生涯をおくったバーブルの、中央アジアにおける少年時代からアフガニスタンを経てインドで過ごした晩年までのものもろの出來事が、彼以外には誰も書き得なかった獨特の文體によって鮮やかに描き出されるさまは讀むものを引きつけてやまず、まさにチャガタイ・トルコ語散文文學が到達した頂點と呼ぶにふさわしいものである。と同時に、そこには當時の中央アジアからインドに至る地域の實狀が、まさにその地に生きた人間の手によって書きつ

づられているという点において、第一級の歴史史料としての価値をも備えている。

この作品のバーブル自身による自筆本は既に散逸し、現在インド、イギリス、ロシア等に寫本の形で傳わるのみである。従ってまづ必要なのは、それぞれの寫本を丹念に比較検討し、相互の間の異同を明らかにすることによってそれらの原典資料としての価値を措定することであり、次にそうして得られた結果を判斷材料として、可能な限り原本（自筆本あるいは原型寫本 *archetype*）の形を復元するための處置が行われなければならない。この作業が「校訂」とよばれるものであり、このようにして提出された校訂本文に基づいて初めて文學・歴史・言語といった各方面からの研究が可能になるのである。

現存する寫本を利用して『バーブル・ナーマ』のチャガタイ・トルコ語テキストを提示する試みはこれまで何度かなされてきた。⁽¹⁾その最初のものとして、ロシアの N. Ilimski が一八世紀の寫本に基づいて出版したアラビア文字活字による刊本 (*Baber-nameh diagaite ad fidei codicis Metropolitan*, 一八五七年 カザン) を挙げる事ができる。この版は Pavet de Courteille による佛譯 (*Les Mémoires de Baber*, 一八七一年 パリ) の底本となったほか、同編纂によるチャガタイ・トルコ語—フランス語辭典 (*Dictionnaire turc-oriental*, 一八七〇年 パリ) や有名な Radloff の辭典 (*Versuch eines Wörterbuches der Türkialekte*, I-IV, 一八九三—一九一一年 ペテルブルグ) においても出典として利用されるなど、トルコ學の搖籃の時期にそれが果たした役割は決して

小さくない。ただし今日の學問的水準から見れば、用いられた原資料の點でも、また Ilimski の編集方針の點でも少なからぬ問題がある。とりわけ後述するハイダラーバード寫本の發見以降、この刊本が依據した原寫本の價值に對して大きく疑問がもたれ、結果として『バーブル・ナーマ』の原典資料としての Ilimski 刊本の價值はかなり低いものと判斷されるようになった。しかし後にロシアの T. G. Djafova が詳細な検討の結果明らかにしたように、この版はハイダラーバード寫本とは別の傳承系統を反映するものとして、『バーブル・ナーマ』の校訂にあたつて参照されるべき價值を十分にそなえているのである。⁽³⁾

一方、一九〇〇年にインドのハイダラーバードで『バーブル・ナーマ』のすぐれた寫本が發見され、その價值をいち早く認めた A. S. Beveridge によつて一九〇五年にロンドンでそのファクシミリ版が出版された。ハイダラーバード本と通稱されるこの寫本は、疑いなく今日知られている最良の『バーブル・ナーマ』寫本であり、その發見及びファクシミリの出版は『バーブル・ナーマ』研究史上大きな意義をもつものであった。しかし皮肉なことに、ハイダラーバード本がすぐれた原典資料であるという認識が定着するにつれて、他の寫本や Ilimski の刊本がもはやかえりみられなくなつていったことも事實である。その結果、現存する寫本間の校合や本文批判といった必要な文獻學的作業を行うことよりも、もっぱらハイダラーバード寫本を最大限に利用して『バーブル・ナーマ』のテキストを譯出することに研究者たちの關心が置かれ、英・佛・露・トルコ語といった諸言語への翻譯が相次いで發表されることになる。

これに對して、複数の原典資料に基づいてより完全な『バーブ

ル・ナーマ』のチャガタイ・トルコ語テキストを刊行する試みは、まずかつてのウズベク共和国で行われた。И. Илмачев と G. Mupjaev の編集によって最初一九四八—四九九年にタシケントで出版され、その後何度か改訂版が出されているキリル文字轉寫(ウズベク語の正書法による)テキストがそれである。この版では、ハイダラーバード寫本と Имински 刊本の兩者に依據して校訂が一應は行われているものの、いかなる原則に基づいて本文の決定がなされたかが明らかにされていない。また提出された本文にも、原文からの恣意的な削除などの不備が見られる。本書の著者はこの版に對し「學術的研究には利用できない」という評價を下している(本書『校訂本』xxx)が、おそらく Илмачев らの意圖は、學術的な版の作成よりもむしろ今日のウズベク人讀者に對して古典文學作品の本文を提供することにあつたと考えられよう。

より「學術的」な目的をもったテキストとしては、近年 W. M. Thackston によつて米國で刊行された校訂本 (*Zahiruddin Muhammad Babur Mirza, Baburnama*, 3 vols., 一九九三年 ケンブリッジ) がある。やはりハイダラーバード寫本と Имински 刊本の兩者に依據してローマ字轉寫を行っているが、一六世紀に作成されたベルシア語譯(二種類の寫本に基づく)及び編者による新しい英譯と對照されている點にその特色がある。この版については本書『校訂本』の序論において具體例を擧げて検討されており、「本來のバーブルのテキストとはかなり異つたものであり、とうてい信頼して使用することはできない」(xxxiv)と厳しく批判されている。Thackston の出版した『バーブル・ナーマ』本文の校訂がこのように不十分なものに終わったひとつの原因は、彼が Имински

の刊本に對する從來のきわめて低い評價を踏襲した點にあると考えられる。⁽⁶⁾なぜならば、Имински 刊本の價值がハイダラーバード寫本に比べて絶對的に劣るとする立場に立つならば、校訂の際には原則として後者の形式が本文に採用されるはずであり、その結果は必然的に「テキストのほとんど全ての部分は日本(『ハイダラーバード寫本』)の單なるローマ字轉寫に過ぎない」(同 xxx)とならざるを得ない。しかしこのような方法による「校訂」が期待される成果をもたらし得ないことは言うまでもない。もし Имински の刊本を評價しないのであれば、Thackston はそれに代わる良質の寫本を校訂材料として用いるべきであつた。⁽⁷⁾

以上のように、これまでに出版された『バーブル・ナーマ』のテキストはいずれも一種類または二種類の原典のみによつており、また本文批判・校訂も不十分なものであつた。これに對し、このほど刊行された『バーブル・ナーマの研究―校訂本』では、上述のハイダラーバード寫本と Имински の刊本に加え、エディンバラのスコットランド國立圖書館所藏の寫本 (*Elphinston* 購入本) と、大英國圖書館所藏の寫本の計四種類を用いて入念な校合を行った點に最大の特色がある。これら二つの英國の寫本(いずれも完本ではない)は、その重要性がかねてより認識されていたものの、從來の校訂本作成者たち (Илмачев-Mupjaev および Thackston) によつて利用されることはなかったものである。更に以上のチャガタイ・トルコ語原典に加えて、一六世紀末のベルシア語譯寫本(大英國圖書館所藏)が參照されている。このベルシア語譯は、現存するチャガタイ・トルコ語原典よりも年代的に古いだけでなく、譯文がチャガ

タイ・トルコ語原文の直譯體に近いという特徴をもつために、本文決定の大きな手がかりとして活用することができる。⁽⁸⁾

なお、このように複数の原典資料を用いて校訂本を作成する場合、各資料の傳承系統が當然問題となるが、本書『校訂本』の序論(XXXX)において「現時點での一應の結論」と斷りつつも、ペルシア語譯を含めた五種類のテキストの系統關係が圖示されているのは研究史上初めての試みとして注目される。

校訂の方針としてはハイダーバード寫本を底本とし、他の原典を参照して校訂が加えられている。校訂の根據や重要な異同が脚注の形で詳細に示されているのは言うまでもない。綴り字については、明らかな誤記の訂正・補正や若干の標準化が施されている以外に、底本のアラビア文字表記に可能な限り忠實に従っている(同XIII参照)。そのため底本におけるさまざまな表記上の特徴が、綴り字の不統一といった點をも含めて校訂本文に直接反映される結果となっていることが注目される。なお本校訂本では、記述内容に従って年ごとに章を分かち、さらに本文中に適宜段落を設けて改行が施されている。この處置は無論妥當なものであるが、底本とされたハイダーバード寫本では、ごく一部を除いて改行も章分けもなされていない以上、無用の誤解を避けるためにもその處置についての注記が必要であつたろう。

著者も述べているとおり、『バーブル・ナーマ』の原典資料はここで用いられたものがすべてではない。現在のところイランや舊ソ連にいくつかの『バーブル・ナーマ』古寫本が傳わることが知られているが、それらは今回の校訂に際して参照されていない。しかし

ながら、古文獻を校訂する際に一個人がすべての原典を實際に檢分できたケースはむしろ稀であり、利用することも難しく、その詳細も明らかでない寫本の参照がなされなかったといって、本校訂本の價值が大きく損なわれるものではない。むしろ本書の出版が、それら未發表の『バーブル・ナーマ』寫本類の整理・公表を促す役割をも擔うことになるであろう。なお『バーブル・ナーマ』原文の復元にあたって、後代の作品に見いだされる『バーブル・ナーマ』からの引用が何らかの手がかりを提供する可能性もある。そのような作品のひとつとして *Sanghar* の名で知られる一八世紀のチャガタイ・トルコ語―ペルシア語辭典を擧げることができる。同書は約二〇〇箇所にのぼる『バーブル・ナーマ』からの引用を含むと言われており、その檢討は『バーブル・ナーマ』研究にとって少なからぬ意義を持つはずである。

校訂本の刊行から一年を経て刊行された『バーブル・ナーマの研究Ⅱ 總索引』は、コンコードランスとしての「全單語索引」及び、人名・地名・術語などの各種「分類索引」とから成る。いずれも上述の校訂本で提出された『バーブル・ナーマ』校訂本文に基づく語彙索引であり、今後の『バーブル・ナーマ』およびチャガタイ・トルコ語研究に大きく貢獻することは疑いない。とりわけ前者「全單語索引」は、『バーブル・ナーマ』のすべての語彙を取り上げた網羅的な索引として他に全く例を見ないのであると同時に、索引を編纂する際にとられた方針の點でも極めて興味深いものである。そのひとつは、「語と語の結びつき、語と接尾辭の結びつきを重視」(「總索引」XIII)する立場から、語幹に種々の接尾辭が附された形

式や、複合表現・連語・定型句などといったいわゆる「語の結合表現」(同 M₂) がそれぞれ獨立の項目として扱われている点である。この處置により、個々の語彙が實際の『パープル・ナーマ』のテキスト中においてどのように用いられているかといった語法・句法に關する情報が索引中に豊富に盛り込まれることになった。いまひとつは、校訂本文が(若干の標準化を別として)底本としたハイダラーボード寫本の綴り字に忠實に従ったことをうけて、本索引においても「語の綴り字の異同に格別の關心」(同 M₂) が拂われた點である。「全單語索引」の各項目は、校訂本文におけるアラビア文字表記(綴り字)の一致を基準にして立てられている。従つて、ある語が校訂本文中に二通り(ないしそれ以上)の異なる表記で現れる場合には、どちらか一方の形式の項目にまとめるのではなく、それぞれの表記形式が獨立の項目として索引中のしるべき位置に配されている。その際に、別項目とされた他の表記形式をそれぞれの項目に注記することにより異なる表記形式の間の相互参照を容易にする工夫が見られる。⁽¹⁰⁾

「語の結合表現」をも見出し項目に含めた結果、この「全單語索引」の情報量は膨大なもの(約三五〇頁)となっている。しかしながら、この膨大な情報量をいかに効率よく提示するかという観点から言うならば、上述のような「綴り字を基本に据えるという方針」(同 M₂)には一定の限界があることもまた否定しがたい。その結果として本索引はいささか複雑な印象を與えるものとなっている。以下に述べる點は、いずれも「本書についての説明 4 綴り字」(同 M₂ M₂ V)で既に言及されていることではあるが、改めて評者の立場から簡単にコメントを加えたい。

一 右で述べたように「全單語索引」ではアラビア文字表記形式に従つて項目を立て、表記上の變異と見なしうる形式も索引中ではすべて獨立の項目として扱われている。この方針は「語の結合表現」に關しても同じように適用されているが、その場合に表記上の變異は必然的により複雑・多様なものとなる。例えば *beginning* 「そのベグたちに」という形式は、翻字で示すならば *byk lryk* (一〇一頁右)、*byk lryk* (一〇三頁左)、*bylryk* (一〇二頁右)、*bylryk* (一〇二頁右) という四種類の綴りにより索引中の四箇所それぞれ項目として挙げられている。ここで四種類の異なる表記形式をそれぞれ個別に檢索できるメリットは確かに大きいものの、索引の利用者があるひとつの綴り字から、ないしは *beginning* という語形から出發してこれら四つの項目をもれなく見つけたすのは必ずしも容易ではない。言い換れば、個別の項目が詳細に立てられている反面、各項目の間に存在するつながりが見えにくくなっているのである。相互参照のための注記を充實させるか、あるいは索引中での項目の配列を工夫するといった處置がとられたならば、本索引はより使いやすくなったであろう。

二 逆に、同じ表記をもついくつかの異なる語(同綴異義あるいは同音異義)が區別されずにひとつの項目の中に混在するケースも見られる。確かに「校訂本に立ち返れば、どの意味を表すか判斷できる」(同 M₂)とはいへ、こういった「混在」のある項目とそうでない項目との區別が特になされているわけではないので、本索引の利用者もし厳密を期するならばどの項目についても逐一校訂本

文に立ち返って全ての用例を確認する必要がある。このことは索引利用者の負擔を極めて大きくするものであるばかりか、そのために本索引がその眞價を十分に發揮できないおそれがあるという意味でまことに惜しまれる點であると言わざるを得ない。

一般に索引(コンコードانس)というものを辭書や語彙集と區別してどう位置づけ、それにどのような役割を擔わせるかという點については今後さらに議論が必要であらう。また一方で、古文獻中に現れる種々の表記上・語形上の變異をどう處理するかは、チャガタイ・トルコ語に限らずチュルク語の歴史的辭書を編集する際に常に直面する大きな問題である。しかしながら、實際に言語資料の中に現れる個々の「語形」や「語句」、あるいは文獻中に見られるさまざまな「表記形式」を分類し整理することによって、一定の言語的單位を抽出することができる。通常「語」と呼ばれるものもそういった單位の一種に他ならない。「全單語索引」が具體的な語形・語句や表記に特に重きを置いたこと自體は十分に評價に價する新機軸であるが、いったん「語」のような抽象的なレベルでデータの整理がなされたならば、大量の情報をより効率よく提示することが可能となったように思われる。なお「分類索引」の方針は「全單語索引」とは異なり、例えば人名索引では一人物を一項目にまとめるといった適切な處置がとられていることを附記しておきたい。

計畫によれば、校訂本・索引に引き續き、校訂本に基づく日本語譯と索引、さらに一四—一六世紀の中央アジアに関する研究篇が順次刊行される豫定である。本書の著者はかつて『バーブル・ナー

フ』全體の約三分の二に相當する部分について、ハイダラーバード寫本及び *Iraniski* の刊本に基づく邦譯を發表しており、⁽¹²⁾ 殘る部分の邦譯並びに注釋・索引の完成が長く待たれていた。今回明らかにされた計畫は、それを引き繼いだ上で一層大規模かつ徹底したものとされており、この間の著者の研究の進展をよく物語るものといえよう。『バーブル・ナーマ』のような大部のチャガタイ・トルコ語作品が、嚴密な校訂テキストと翻譯・語彙・注釋をすべて備えた形で出版されるのは世界でも初めてのことである。全卷の一日も早い完結を鶴首の思いで待つのは評者だけではあるまい。

註

(1) 一七三七年にペテルブルグで東洋學者 G. J. Kehr によって今日所在不明の一八世紀の寫本から筆寫されたもので、現在同市のロシア科學アカデミー東洋學研究所支部に所藏されるといわれる。

(2) Г. Ф. Бранова, *《Багур-наме》 Якут, грамматика текста, стихи* (一九九四年 モスクワ) 二四—四四頁、
閔野英二「『バーブル・ナーマ』の研究(Ⅲ)」A・S・ベツ
アリッジとハイダラーバード寫本」(『京都大學文學部研究
紀要』二四、一九八五年) 四四—五八頁等を参照。

(3) この見解が正しいことは、本書の著者によって行われた他の寫本との校合の結果からも確認される(『校訂本』 xxviii 参照)。

(4) 例えばハイダラーバード寫本七五a一四—七六a一二(『校訂本』一一一頁の一四行目から一二二頁の最後まで)。

同じく二四 a 一—二二(＝同一九二頁の三四行)に相當する部分は、何の断りもなく本文から削除されている。また同じく九八 b 一(＝同一四五頁一六行目)他に見える *köt bergüzi* なる表現も本文では「伏せ字」扱いになっている(これも一九〇年の版による)。なおタシケント版と今回の校訂本との比較は、週刊紙 *Yödenucmon Adabülmü ea Cihannu* の一九九六年三月一五日號に掲載された A. Adyrtapypov と A. Ypunoöes による紹介記事に詳しい。同記事は久保一之氏により邦譯されている(『西南アジア研究』四五、一九九六年 六一—七三頁)。

(5) 英譯の部分は、多くの美しい圖版を含む *The Baburnama, Memoirs of Babur, Prince and Emperor* (一九九六年 ニューヨーク)としても出版されている。

(6) Thackston の Ilminski 刊本に對する評價については、Thackston 1993 vol. 1: x-xii を参照。

(7) Thackston はペルシア語譯を用いることによってこの問題をある程度回避できるはずであったが、註(8)に述べる理由からそれは成功していない。

(8) ペルシア語譯の利用は、上述の Thackston 版においても見られたことであったが、Thackston は『バーブル・ナーマ』のチャガタイ・トルコ語原文とペルシア語譯文のそれぞれの校訂本文の作成を目的とし、その際にチャガタイ・トルコ語原文の校訂材料としてペルシア語譯文を用いる一方で、ある箇所では逆にチャガタイ・トルコ語原文(主としてハイダラー・バード寫本)を根據にペルシア語譯文に變更を加えて

いる(『校訂本』xxxix-xxxix, xi)。しかしこのようなやり方は、本書の著者も指摘するごとく「テキストの改惡」(同 xxxix)であるばかりか、もし無原則に適用されるならば一種の堂々めぐりに陥る危険性をもつものであり、方法論的に大きな缺陷であると言わざるを得ない。

(9) 「分類索引」は次の各索引から成る。1 人名 2 地名 3 民族名、部族名、出身地名 4 術語 5 動植物名 6 諺・格言 7 詩 8 書名、論文名 9 難解語。

(10) 但しこの注記は「必要と考えた最小限の場合に限り」(『總索引』xv)附されている。

(11) 索引の各項目は、アラビア文字表記による形式と『校訂本』におけるページ番號及び行數から成っており、ローマ字轉寫や譯語は與えられていない。

(12) 関野英二『バーブル・ナーマ』の研究(一)「フェルガーナ章」日本語譯(『京都大學文學部研究紀要』二二、一九八三年 一八九—三四七頁)、『バーブル・ナーマ』の研究(二)「カーブル章」日本語譯(『京都大學文學部研究紀要』二三、一九八四年 二九—三三頁)。

I 一九九五年二月 京都 松香堂
B 五判 六一〇+iv 頁 一八〇〇〇圓
II 一九九六年二月 京都 松香堂
B 五判 四四三+iv 頁 一二五〇〇圓